



カメラ探訪

文学のふるさと

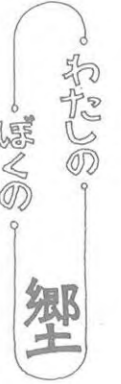
その24 御船町

随筆「酒のさかな」

すみのえ きんし
—住江 金之—

日本一の酒造りになって、日本の西半分は俺の酒を飲ましてやるんだと、大きな夢をいだいて大学に入った。ところが大学に来てみると外国の学問ばかり。すぐ役立つ酒造りの方法などちっともでてこない。しかし夢中で勉強するうち醸造学の魅力にひかれていった……住江は明治22年6月現在の御船町に生まれる。御船町はかつて県下第一の“酒造りの町”として知られたところ。

御船川沿いに築かれた石垣に林立する白壁の酒蔵は安政、文久、慶応から明治のころの建築で百十年余りたったいまでも堅牢さを誇り、盛んだったころの姿を残している。



「肥筑の境 山青く
自然の恵み 豊かにて
山に山幸 野はみのる
われらの郷土 栄えあり」

鹿北町立鹿北第二小学校 六年 芋生里美

野口雨情先生が、鹿北の地に来られた時、作詩されたというこの二小の校歌に、私達の美しい郷土のすべてが歌いこまれています。緑の美しい山々に囲まれたわが郷土鹿北町は、熊本県の最北端にあつて、小栗峠が福岡県との境であり、熊本市へ南四十二キロ、福岡市へ北六十五キロ、国道三号線が通じていて、交通が非常に便利な所です。

自然の恵みは、緑こい森林をはじめとして、茶、くり、しいたけ、たけのこ、わらび、ぜんまい、みかん等、山の幸が大変豊富です。今年の八十八夜には、私達五・六年生も、日本一の鹿北茶を目ざして、全国大会に出品すると言うお茶つみに、みんな汗を流しました。

海のない山の町で、海の幸には恵まれません、その代わり、流れも清らかな岩野川で、きれいな空気をいっぱい、かがやく太陽をあびて、夏の水泳が思いっきり楽しめます。

また、この清らかな流れを利用して、このあたりは、加藤清正公のころから、和紙作りがさかんだったそうです。現在は、もう紙すきはしていませんが、原料のかごの木皮はぎは続いていて、今も福岡県へ出しています。

美しい川と共に、眼鏡橋もまた鹿北の歴史を語りかけています。宮城の二重橋や日本橋をかけたという、名工橋本丈八さんの手による高井川橋をはじめとして、多くの眼鏡橋が、昔をしのぶ偉大な永久橋として、いついつまでも残されています。

昨年、新しいふるさと作りに、町中の人々が力を合わせ取り組んで、今年二年目です。二十一世紀の鹿北町を目ざすと共に、勤労感謝の日には奉納する「かぐら」をはじめ、盆の日の綱引きなど、美しい風習も、さらにうけついでいきたいと、私達は思っています。